

漢文

四

No. 7

1958.4.

# 溪 稗 No.7

辻 蔵 書

時がたつにつれて、私たちはあの山から草なる頂上の石よりも何か尊いものを持ち帰つたのに気付き始めた。……私たちはかの試録の時を憶えている一にれも裡すことなく、それに打ち勝ったあの時のことを。……

——チャールス・ハウストン——

## 目 次

- ▷ 卷頭隨想—山に求めるもの ◇ ..... 丁生(1)
- ▶ 志賀高原、石打スキー合宿 ◇ ..... (3)
- ▶ 吹雪のツァー ◇ ..... 斎藤良則 (4)
- ▷ 句・歌—発哺にて ..... 斎藤良夫 (6)
- ▷ 山折り折りに—山のノートから— ◇ ..... 辻勝四郎 (7)
- ▶ 三月の白毛内 ◇ ..... 管野達也 (9)
- ▶ 冬の安達太良山—スキーツァー — ◇ ..... 山縣昌彦 (11)
- ▷ 雪女のことなど ◇ ..... 辻 宏視 (15)
- ▶ 霧ヶ峯スキーツァー ◇ ..... (17)
- ▶ 池のくるみ—車山—南平—蓼科温泉スキーツァー ..... 篠崎介二 (19)
- ▶ 冬の谷川岳 ◇ ..... 吉田泰彦 (20)
- ▷ 仲間のエピソード ◇ ..... T.M., K.T. (22)
- ▶ 春の吾妻耶山—合同山行報告— ◇ ..... 龜江資之 (24)
- ▶ 三月の仙丈岳 ◇ ..... 柿沼 博 (26)
- 
- 1957年度会員山行一覧 ..... (32)
- 会務報告 ..... (34)
- 溪稜山岳会会則 ..... (36)
- 会員名簿 ..... (38)
- 編集後記 ..... (40)



## 山に求めるもの

「秋の一夕、○や△と会したとき、つれづれの話が何故山に登るのか?」といふ詰題に及んだことがある。その中で、或る種の潔癖さを持つ〇が言ったものだ。「俺はもっと若い頃には山に登るということに何か純粹なものを持っていた。登るということは一つの目的だったのかも知れない。けれど近頃の俺にはその純粹さというものが薄れてしまっているよう思えるのだ。世俗からの逃避という形で山に登っているのではないかと思うことに、何か心の叛しさというものを感じる」年長の△はこの説に肯定しながらも山至上主義者としての幸福観を述べている。「俺は誰もいな尾根を唯一人でいろ／＼などに想いをはせながらトコ／＼と歩いているときに幸福というものを感じてくる。」

それに対しても私はこう反論したことを憶えている

- ・「俺はそうじやない。俺は何も考えたくない鳥に何も考えまいとして山に登るんだ。」
- ・「俺はそうじやない。俺は何も考えたくない鳥に何も考えまいとして山に登るんだ。」
- ・「俺はそうじやない。俺は何も考えたくない鳥に何も考えまいとして山に登るんだ。」
- ・「俺はそうじやない。俺は何も考えたくない鳥に何も考えまいとして山に登るんだ。」

登山ブームで山に登る人が多くなつた。その人達がどのよう気持て山に登っているのかは分らない。所詮登山というものか、あくまでも個人的なものであり、各人が自分の考えに従つて自分自身のやり方で山に登れば良いのだろうから。だが大半の人は山をエンジョイする爲に登つていて、ではないだろうか。ひょっとすると登山の極致といつもの後にも先にもその一歩に存するものなのかも知れない。とすれば、現在の私は情ない程にそれとはかけ離れてしまっている。

### ○

近頃の私は好んで岩を登るようになった。そこにはスリルを求めるという要素があるかも知れない。記録の爲といふ要素があるのかも分らない。しかし私は登ることの外は一切を考えない爲だと心に言い聞かせては山へ出掛けるのである。だが、何も考えまいとして登りながら、そこでは裸の自分自身の姿をいやという程見せつづられて私は山から帰ってくる。

寒場に唯一一人で瘤もと膝面もよく晒されるありやり切れの焦燥、それは人間本性の横性であり、抜り出すことの出来ない人間の本質的な弱さなのかも知れない。それとも私は人一倍臆病であり、寂しきり屋であり、感傷家のであろうか。少なくとも、フランスの偉大な登山家の一人であったラシュナルのような死に対する一つの割切った考

之方の出来ない私は、岩肌に蠅の様にしがみつたながら、相手の山を罵倒することもやめず、自分自身の弱さに

声を出して罵り、自分を鞭打たねばならないのである。

人はそれを「あ前の技術の未熟から来るのさ」と一笑に附するかも知れない。それはある意味において本當だろう。私は専近な例をとてひと訪したことがある。「山に対する本当の心構え」というものは、技成り人成った宮本武蔵の悟り切った無念無想に通するものではないだろうか。

だが考えてみればこの効能の相手が互いに情の通ずる人間であつたのに対して、我々の対する山は我々とは情を通じてはくれない。そこには何らの妥協もなければ強引もない。たゞあるのはあの容赦のない、啖き放すような非情さだけである。

## ○

長い間、私は私の山行を逃避とは考へなかつた。ずっと

以前から私はそれを青春期の情熱のひらめきと決めてかかっていた。しかし、何も考へたくないために登るんだ

というその前提的な信ふは、逃避でなくて何であろう。私はいつも淋しい時は一人で山へ行った。そして長い間の山との附合いから私が感じ取つたのは、人間としての孤独という外の何ものでもなかった。そして同時に私が悟つたのは、所詮人間には本当の意味で自然を征服す

るほどという大それたことなどは出来ないということであつた。

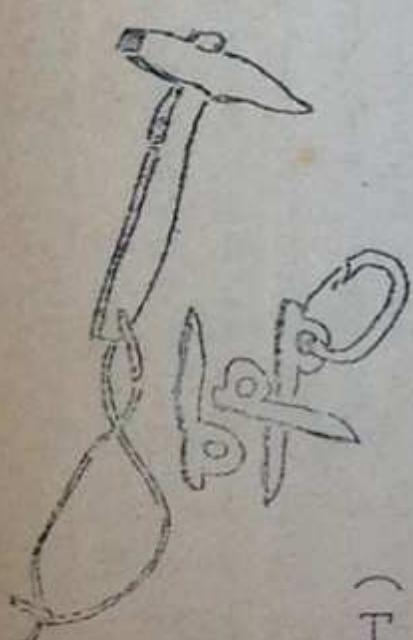
時には奥深い山のヤブの中で私は一人で寝ることがある。そんな自然の懷に抱かれながらも、私は人間としての殻から抜け出すことは出来ない。自然を本当の姿において掘る前に、人間としての弱さが私の心を先に掘んでしまうのだろう。

## ○

こらの私は、その動機が逃避であろうとも、そんなことは不感に付すだろう。山において自分を赤裸々にされ、未熟を指摘され、弱さを指摘されても、それは私にとって決して不快なことではない。而も私はそれによつて人並に徐々に成長して行くだろう。

私は自然に打ち勝てるとは思つていない。だがいつかは対等の力で附き合い理解し合うことが出来ると信じている。

(丁生)



# 志賀高原・石打スキーコンペ

〈場所〉	志賀高原発哺(ブナ平ヒュッテ)	石打中之島(石打旅館)
〈日〉	32年12月29日～33年1月4日	1月1日～6日
〈MEM〉	山縣昌彦・柿沼博・直井正男 筒井満栄・東 宏・篠崎介二 村田俊満・齊藤良夫・齊藤良則 田中良	大武昭雄・辻勝四郎・辻宏視 管野達也・田中亮二・星野光基 他現役7名 他現役8名
		猶ほ発哺より5名合流

溪谷山岳会登足以来、始めてのスキー合宿が母校山岳部と合同で、旧暦29日より正月6日迄の9日間、志賀高原発哺、及び石打中之島スキー場の二手に分れて行われた。例年にない暖冬で雪不足に悩まされ、特に志賀高原の方で予定した草津へのツアーや竜王越えが出来なかったのは残念であった。然し全員上々のコンディションで猛烈な練習の甲斐あって技術的に相当の進歩が見られ、かつ和気あいあいの中に無事合宿を終えられたことは嬉らしい。以下合宿の簡単な記録と観小屋までのツアーレポートをせる。

12月29日…前夜上野発、長野、湯田中経由でAM.10:30頃発哺ブナ平ヒュッテ着。列車は宿泊の混雑、雪少く丸池あたりでは十分滑れらしい。ブナ平のゲレンデは大体十分の雪があるが下部斜面は一面にフッシュが頭を出している。  
午後基礎練習、直滑降を中心とする。

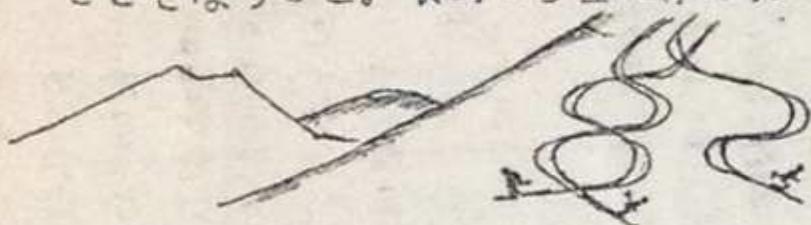
30日(雪) 全員シュテムクリステヤニヤまでこなせるようになる。何  
31日(雪) しろ朝8時前から夕方5時過ぎまで昼食の1時刻の休みも  
そこそこに猛練習、東コーチも舌を巻く程の上達ぶり。それだけに食欲も旺盛、山盛りの丼飯を3杯ずつ平げる猛者達に、ブナ平ヒュッテの親爺さん、炊く米の量を大幅に増加せざるを得なくなる。発哺線リフトを利用しての練習も始めたが、ブナ平下部のフッシュの出した斜面が悪場。此処を無事通過するのは溪谷諸君にはかなりの困難と見えた。

1月1日(晴) 高天ヶ原へ登り、竜王越えのルート偵察。雪少くこのツア  
2日(晴) ーは中止と決める。東館、西館等について偵察。

ブナ平、及び発哺線リフトによる練習。

3日(雪後晴) 観小屋まで往復のツア。

4日(晴) 午后1時ブナ平登帰路につく。丸池よりバス代を渡かそうとバス道を滑降、ところが道路の上に薄く残った雪はチーンをつけたバスのタイヤに踏み固められて洗濯板のようなガリカリの雪面で、スキーはガタガタと物凄い音を立て、素々飛ぶ。上林の少し手前で完全に土が現れて来たのでやっとスキーを脱いでみたら、どのスキーも滑走面は大禿げ。上物のスキー使用の街仁のこぼすことここばすこと。長野から直江津、長岡経由で石打へ向う。



## 吹雪のツア

II 発哺→横手山観小屋 II

ヘ日々一月三日(雪後晴)  
ヘMEMM山縣・柿沼・東・筒井・篠

崎・村田・齊藤(良則)

### — 齊藤 良則 記 —

今日は朝から薄暗く風も強い。今迄毎日のように朝だつはきまつて雪が散らついていたが、今朝のは一寸違うようだ。出発がや、遅れ八時半ヒュツテと後に吹雪の中へ飛び出す。夜未の雪で新雪が二、三〇釐積っているので、また誰も出て来ないブナ平の綺麗な雪面に思いくのシユフルを書いて下る。昨日までに較へ物凄く寒い。一寸止つていてるとセーターにヤッケを着込んでいても震えてくる程だ。一気に登

リフトを降り、右手の林を渡るとバス道路に立る。こ、からスキーを扱いても良いが我々は足馳らしの鳥に、シールをつりてスキーして行く。丁度九時。

緩い登りの道を暫く行くと三箇池である。厚い氷の上に雪の積つた池を真直に渡り再びバス道路に出る。間もなく右側が展り、太ナ池のゲレンデが見える。近路をとるべくバス道から外れてゲレンデへ、そしてリフトで向う側へ越えて再びバス道を行く。風は相変わらず強く吹雪で視角は利かないが広い道は凍々に赤いポールも立つられ間違える心配はない。

平坦な道を暫く行けば熊の湯温泉と熊の湯ゲレンデとの分歧点に着く。温泉はすぐ右下に見えたが用がないので左手の道をなおも進むとゲレンデに着く。

い上部はそれでもかなりの雪が付いているようだ。

リフトを降り、右手の林を渡るとバス道路に立る。こ、からスキーを扱いても良いが我々は足馳らしの鳥に、シールをつりてスキーして行く。丁度九時。

道の右側に並んだ休憩所の一つに入つて腹ごしらえをする。十一時、此處で今日帰られる柿沼さんは引返す。我々は横手山を目指して出発。ゲレンデを過ぎると道も急に狭はまり、雪も深く登りとなる。道はえぐられにような幅一米足らずの凹みて、両側の雪面は胸の高さぐらいである。風は相変わらず強く、積った新雪を吹き飛ばしているので視界は利かないが、道傍の針葉樹は厚く雪に覆われて見事は樹氷が依られつゝある。

シールを利かして黙々と登る。余り寒さは感じない。もう少し汗ばみながら一時間も登るヒ小屋に着く。観小屋である。立派な小屋で、外の吹雪をよそに内部は非常に暖かく、鳥籠の中では可愛い小鳥がさえずっているのには驚いた。今朝普段平で焼いて来た餅を食べる。筒井さんからはチーズの特配があり美味しい。

本末は横手山を越えて草津へ下る計画であつたのを、草津側は雪不足とのことで今日は横手山迄のつもりで来たのだが、この荒れ模様ではとそれも敬遠してこから引き返すことにする。

道の右側に並んだ休憩所の一つに入つて腹ごしらえをする。十一時、此處で今日帰られる柿沼さんは引返す。我々は横手山を目指して出発。ゲレンデを過ぎると道も急に狭はまり、雪も深く登りとなる。道はえぐられにような幅一米足らずの凹みて、両側の雪面は胸の高さぐらいである。風は相変わらず強く、積った新雪を吹き飛ばしているので視界は利かないが、道傍の針葉樹は厚く雪に覆われて見事は樹氷が依られつゝある。

シールを利かして黙々と登る。余り寒さは感じない。もう少し汗ばみながら一時間も登るヒ小屋に着く。観小屋である。立派な小屋で、外の吹雪をよそに内部は非常に暖かく、鳥籠の中では可愛い小鳥がさえずっているのには驚いた。今朝普段平で焼いて来た餅を食べる。筒井さんからはチーズの特配があり美味しい。

風は相変わらず強いが雲が切れて薄日さえとして来た。どうも目の周りが変な感じだ。何かに遮られてよく見えはないのに、東さんの顔を見て介ったのだが眉毛やマツ毛についた蒸気が寒この

ゆっくり休んだ後、再び腹ごしらえをして小屋の外へ出る。あたまつた身体もスキーを履く僅かな間にぐんぐんと冷え、指尖は忽ち感覚がなくなってしまう。風は一層強まっているようである。山縣くんをトップに待望の滑降に移る。吹雪のために路がよく見えず、又新雪のために思つように曲れず苦労する。ゴーグルが曇つてしまふには扇口、試しても／＼すぐ曇り全然視界がきかない。壽命に前の人の中、シュアーリを這うのだが、転倒したりゴーグルを拭いたりして次オに距離が開いてゆく。とう／＼思い切ってゴーグルをはずす。然しそれ正西ガラス故なく吹きつける壁片に目は痛み涙が止まらない。目を細めて懸命に下る。登り一時間二十分の処を二十分足らずで下って熊の湯ゲレンデに到着。

風は相変わらず強いが雲が切れて薄日さえとして来た。どうも目の周りが変な感じだ。何かに遮られてよく見えないのに、東さんの顔を見て介ったのだが眉毛やマツ毛についた蒸気が寒このため凍結したのであった。どの人の顔を見ても真白に雪の詰まつて、がつりてサンタクロースのようである。

木戸池の小山は今度はリフを便わすスキーをはいたまま、一段登りで登つて向う側へ一気に直滑降、全負転倒せずに下り切る。再びバス道のたら／＼坂を下り、次第に混んでくる人の群の中を縫いながら丸太で右へ押されてシャイアンツスロープへかかる。雪は少い方からも滑降していくスキーヤーもいるのを見ては、溪谷会員たるものリフトなんか使つて下りられますか、とばかり勇ましく下り始める。おや切り株や枝の一面に露出している中を雪を探しあから斜滑降、なかなか乗てはしない。左んとか下まで滑り降りてみてみたらスキーを傷だらけにしてしまっていた。

ツアードも終りである。もう陽も西の山にかくねようとしている。風はまだあるが空は茹んど晴れ上り、夕焼けが紅い。妙高の山々が今日も又微笑んでいるようだ。リフトから冷え切った身体を暖めし、ブナ平へ滑り込んだ時には既に夕暮れのヴェールがあたりの雪山を包んでいた。

ヘコースターム

ブナ平(八・三〇)一丸池(九・〇〇)一熊の湯(一〇・四〇着一一・〇〇発)一覗小屋(〇・二〇着一・三〇発)一熊の湯(一・五〇着二・〇〇発)一丸池(三・〇〇)一ブナ平(四・三〇)

△註△

・積雪量 発哺五〇～一〇〇 cm

(石打二〇～五〇 cm)

## 湯暖にて

齊藤良夫

ぬるき湯に今宵も通う雪。冬。

どこへ行ってもお湯に入らなくては気の済まない御仁の御相手として、夜ブナ平ヒュツテから五分以上も雪の夜道を歩いては天狗の湯へ通う次第と相成った。天狗の湯の浴場は新旧二つあり、我々は専ら空いている古い浴場を愛用、但しこちらの湯はぬるく、浴槽中の我々の円陣は順々に移動して湯の落口で辛うして暖たまつた。從つて我々の入浴時間は毎夜一時間となつたのである。

湯口まであと二人待つひばの風呂

心地よくのぼせて再び雪の夜道をぶらくとブナ平へ下つてくるうちに、手にしたタオルはカチカチに凍つて棒状になる。

湯上りのタオルで空の星を指し(山彦)

ひえひえと雪道照らす十二夜のモミの左に長野の灯見ゆ

雪、月、満天の星、うかく、奥歴する下界の灯、止の友情で結ばれた仲間たち、何という幻想的世界、メルヒエン、……

それにして、豪華な天狗の湯の建物を後にして、あの曲り角を曲つてさ、やがてブナ平ヒュツテの灯を目にした途端、「あ、ブタル屋だなあ」ともらして前衛の幻を破つた不心得者が居た。や。

素末ながらも、いや素末だからこそ快適な合宿だった。あれが天狗の湯だ。

ろう。それにしてもよく喰いよく寝たものだ。寝てまでも夢はケレンテと馳りめぐるのか、深夜時ほらぬ叫びを上げる者も居た。

疲れたる友等何を尋みてか

しきりに高き声とあげあり

山小屋の朝飯うまし若さざの

ウロコは光る新雪に似て

晴れていさえすれば正面に妙高がよく見えた。

雲切れる妙高山の姿見て

いそぎ画帳におこめてうれし

積まれたる薪木の中にまさりたる

白棹はかし友に送らん

この積まれた薪木に、近藤さん作成の済穂の旗を結き付いた竹竿が合宿中ずっと突き立てられていた。はたはたと旗は風にはためき、我々の姿を見つめていた。

(完)



## 山折り／＼に

——山のノートから——

辻 勝四郎

いやほトラバースだった。その岩場の途中には一本の古びたハーケンが打ち込まれていた。しかし単独登攀の俺にはそれが何等の助けにもならない。もうその先には確實なホールドは見当らなかつた。俺は何回か足を動かしては、又もこのスタンスに足を戻した。そしてその度に、未練たらしくそのハーケンを見つめた。何回かの逡巡の後、俺は思い切ってスタンスを見つめた。ホールドかくらついたと思つた瞬間、体は岩を乗り切つていた。

ペツトリと汗をかい、息をはずませる俺の目の前で、岩間に咲いた可憐な花が一輪、無心に風にやられていた。

(六月、一の倉)

僕松の藪は果てしなく長かった。ひよっとすると俺は永久にこの藪から抜け出ることが出来ないかも知れない。もうまともな所に帰れないかも知れないと。俺は肩で大きく息をつくと、背丈より高い僕松の枝に乗っかつて藪から首を出して見た。

見渡す限り僕松の波は続いていた。そしてその青いジュウタンの波の上を、冷い霧がなめるように静かに流れていった。俺は、ふと思いついたように再び僕松の中に潜り

込もと、枝を払い、根を踏んまえては、又がむしゃらに

藪を漕ぎ始めた。

(七月、南ア)

身近で雷がなった。そして豪雨が来た。俺とKとは夢中で灌木の藪の中をこうぐるようになりていった。

又雷かなつた。何回か足をとられ、尻餅をついては小沢の中を走り降りた。そして遂にはたまらなくなつて岩の下に足を停めた。雨足は弱くはならなかつた。全身すり濡れになつて、しづくの垂れる岩にもたれながら、晴れている笠ヶ岳のあたりを見やつては俺達は舌打ちをした。

俺は悶々と濡れたマッチ箱を取り出すると、寒さに震える手でマッチをすつた。ふすくと煙りながら、それでもマッチは燃え出した。そんな俺をKは不審そうな目で見つめていた。

俺にとつては燃えている焰を見ればそれでよかつたのだが……。

(八月、幽の沢)

長い旅路が終つて俺達は傾斜のゆるい尾根の裾を歩いていた。背のリュックもいつの間にか小さくなつて、もう尻の前には岩もなければ長い雪渓もなかつた。たゞ狭い山径だつが秋草の中を長く遠く繰りいていた。

下界では余り見なかつたイナゴが、この山では多かつた。それが歩くたびに徑に跳び出して来る。始めのうちは俺はイナゴを踏まぬようによつては歩いていたが、やがてそれにも無感覚になつて、彼等を何匹も踏み潰しては調子足どりを繰りた。ひぐらしの声がこの夏との別れを告げるよつに鳴き続けていた。

(八月、北ア)

暗い木立の中、落葉の上を歩いていた。カサカサと鳴る乾いた落葉の音が冷たくなつた耳に快よかった。

俺は喘ぎ疲れて落葉の散り敷いた徑に横になつた。床の間のテントの入口から夜空がのぞいた。俺は体を乗り出して空を仰いて見た。星があたかも宝石のはくはくようにきらめいている。俺は今迄あまり用心をもつて星空を眺めたことはなかつた。ふと俺はつぶやいてみた。

「星ってこんなに多いものだったかな……。」  
「そうさ、無限だろう……」Yが言った。  
俺達は駄つたまゝ、長い間夜空を眺めていた。

(八月、北ア)

「星ってこんなに多いものだったかな……。」  
「そうさ、無限だろう……」Yが言った。

(3)

つた。紅葉の葉を透した彼方で、朝焼けの雲が赤々と鮮やかな色に染っていた。

もう畠もほくこの山にも冬が来るだろう。雪を待つ山は静かである。

(十一月、白毛門)



## 三月の白毛門山

管野達也

（日）三月二〇日（曇）  
MEM 山縣・管野

土合着午前三時、列車からまことに真暗な土合駅ホームに降り立ったのは我々二人だけであった。駅附近は雪も割合に少く、五六〇cm程であろうか。

駅舎の中で身こしらえをし、山の家へは寄らずに東黒沢へと向う。谷川岳への道との分岐点あたりで膝ふでもぐるようになりワカンをつける。真暗な空には星は一つも見之ない。やはり天気は良くないらしい。「管野と一緒にちやあ」と山縣さんはぼやく。

大体今回の山行は、辻・吉田両君の西黒尾根より谷川岳登頂の後を受けて計画されたもので、白毛門山より出未たら稜線を笠ヶ岳まで往復し更にウツボギ沢をスキーテ滑降して宝川へ下ろうというものである。降路の状況は不明であるし、明朝は溪谷の合同山行の連中が上牧へ着くのに合流せねばならないので時間的な制約もあり、これから先が少々心配である。

積雪と暗さのため地形がよく分らないが、無雪期の東黒沢渡渉臭のあたりは、両岸は積雪のため水面よりずつ

と高くなつてあり、夜のせいが黒々とした流がかなりの水嵩なので渡渉を諦

め、しばらく戻ってから銀行のヒュッテへの径に入り橋を渡つてヒュッテに広る。ヒュッテの裏からは山を捲くよううに右手に細い道（薪木を運び出す道らしい）が踏まれており、その途中白毛門への登り口に、木に赤ペンキの印がつけられてある。

雪はかなりしまつてゐるが樹林帶のあそろしい急な登りは、重荷とスキーチを組いてでは容易ではない。山縣さんは登りにくいからとワカンを外した。これで容易ではない。山縣さんは、この調子では宝川の最終バスに向むかへるには始末の悪いものだ。ぎっしりしつけたままの重荷を背負つて、腰にかかる。手の力にもやがず、脇にか、之たり、手にぶら下げたり、或はいちいち前に投げ出してはそれに手をかけて体をすり上げて登る。

どうにか尾根に出た頃、夜は白々と

明りてきたが、周りの山々は濃いガスに隠されて展望は余りきかない。たゞ西側のや、境界が展ひ、マチガ沢の雪

溪が望まれるが上部はやはりガスって

いる。

尾根を辿つて樹林帶の登りかなおもじく。山縣さんも既に相当バテたらしく、重い足どりでやっと白毛門の頭を正面に望むところに立たのは七時。右手には雪に埋もれた白毛門沢が突き上げ、その上部に沢をはさんで内柱のように大きな岩塔が二つそば立ち、その頭には積つた雪の中から灌木が突き出して人面の白毛頭のよう、白毛門とはうまく名付けたものだ。

とにかく山縣さんもグロッキーだし、この調子では宝川の最終バスに向むかへるには始末の悪いものだ。ぎっしりしつけたままの重荷を背負つて、腰にかかる。手の力にもやがず、脇にか、之たり、手にぶら下げたり、或はいちいち前に投げ出してはそれに手をかけて体をすり上げて登る。

どうにか尾根に出た頃、夜は白々と

明りてきたが、周りの山々は濃いガスに隠されて展望は余りきかない。たゞ西側のや、境界が展ひ、マチガ沢の雪

になつてきただのでアイゼンにはきかえる。頂上近くはかなりの傾斜になり、前々ピッケルでステップを切る。あたり一面灰色で雪のちらつく中を白毛門の頂上に着いたのは九時少し過ぎ。展望もきかず、小休止の後、再び登路を引き返す。森林限界の少し上部迄下ると、谷川岳方面のみガスが切れ、東面の氷壁が姿を現わした。さすがに一ノ倉は凄い。特にコツア状は殆んど雪が付いておらず、その峻険さを示していく。帰途、この谷川東面の氷壁を見させてくれたことが、この山の我々に対する唯一の好意であつたようだ。土

合着午后一時半。

土合リ白毛門—宝川のコース

はスキーを白毛門まであげるのが容易でないか、好天の日に荷も軽くしてやれば日帰り可能かも知れない。来年の課題である

# 冬の安達太良山

(土湯—安達太良山—岳)

一山 縣昌彦



る。彼は岩原、会津若松で一週間過ごしてから私と合流したのである。

福島駅に着いたのは未明、暗い空から小雪が散らつてゐる。相変わらず物林しい東北の駅である。やがて始発の土湯行のバスに乗る。高湯行には十名ばかりのスキーヤーが乗ったが、土湯へは我々二人だけである。

夜の明けるにつれて雲が次々に切れ

車窓から懐しい吾妻小富士や東吾妻山の白い姿が望まれる。終点土湯は立派な温泉街で此処に野地温泉の案内所があり、立ち寄った我々にお茶と御馳走してくれた上、細かくコースを説明し更に土湯を出はすれるまで道案内をしてくれた。こゝがら野地まではバス道(冬季不通)もあるがかなり遠回りなので我々は夏道沿いに近道を行くことにしたのである。昨日五十人近くもの獵師が野地から下りて来たそうで、雪も踏まれていてから大丈夫だと言われたのであったが、乾いた雪が風に飛ばされ

され、又今朝方降った雪のためにはんど踏跡は消え、脚もほく腰近くまでもぐるようになり、二人ともスキーリングを履く。空は真青に晴れ上りキラリと結晶の輝く純白の雪面に快調なピッチでシュプールをひいてやく。緩い登りが続き、赤く塗った小さな板片が凧々の木に打ちつけられて目印となっている。

間もなく斜左前方に鬼面山と正面に松倉山を望むに、広い雪原に出る。鬼面・其輪の稜線からは物凄い雪煙が風に飛ばされてやくのか見える。この雪原ではたゞ道を失った二人で手分けしてルートを探したが見つからず、結局正面の灌木の林をかき介りて山の脇を越こよつとブッシュをかき分け、進む間に登りだしたが、長いスキーをつりてつづりのアルバイトに向口し、展望の木屋根に出て双眼鏡で見廻すと、先

(期日) 二月二二・二三日  
(MEM) 山縣昌彦・篠崎介二

オ一日(晴)

金旺日の東北線を行はる車の少し前に乗り込んで来るには有難い氣楽は一人旅で駆けているうちに郡山を乗り込んだ篠崎君に起こされ

程の雪原の右手にある沢の対岸に動く

人影を発見。やはり（とは後で二人と）

も発した言葉に（か）ルートはこの雪原

の縁に沿って右手であった。やつとのことで再び敵を抜け出し、間もなくそ

の獵師達に追いつく。松倉山の肩まで

少し急登、灌木はやかて気持のよいブナの疎林に代る。先程一時間程口なしにため、時計は正午を廻り、注意された通り昼夜近くから西風が強くなり、空は晴れていたが、ブナ林に吹る風の音がすさまじい。

暫く休んだ後、獵師達の後を追つて

スキーを担いで登る。ところで肩に出

て二人とも全く驚かされた。こゝで急

に西風をまともに受けたことになり、

風は雪、氷の粒を真正面から吹きつけ

ひし／＼と音を立て、ぶつかってくる

には頗も向うていられない。風にあ

おられるスキーを死に抱いて暫くは

後回きに足探りで進む。頗の感覚がなくほんとうに頃、ようやく森林地帯まで下

いて、にが此の風の洗礼を受けたこ

ヒが翌日のために非常に良かつた。

一投足で野地温泉、雪に埋もれて森困とした建物は雪のトンネルをくぐつて入るようになっていた。一階は吹きつける雪を防ぐように全部藁で覆われている。

暫く休んだ後、明日のルートの偵察

に、旧土湯峠から鬼面山中腹の切開

きの途中まで往復する。猛烈な風、ウ

イントラストにも大部慣れて帰つてくると、幕川まで行くと言つていた先程の獵師達が風のために引き返して来た。客はあと沼尻から登つて来たスキーヤー三人たりである。

湯は快適な硫黄泉(50~100度)胃腸病・婦人病・神経痛に良し。夕食は豪勢なスキ焼き、お汁粉もサービス。これで

五〇〇円(一泊二食)は安い。

## オニ日(快晴)

朝の冷氣の中を宿の人の声に送られて出発。このコースは一と冬に

何パーセンティも通らず、カイトをつけた方が良いと宿の人は言ったが、采

稜の面目にかつてもと我々二人勇躍出発。コースの研究、装備には大体

自信があるが問題は天気だ。幸い雲一つなく黒いまでに青い空、まさに風

もない。

鬼面山中腹まで昨日のシュブールを辿つてスマースに進む。昨日の引返しを感概を以て通過、処々にある板片の標識は見失われかちではあるが、森林帶をスキーと滑らせていくうちに、目標の雪庇の下に丁度

る。こゝは鬼面山と箕輪山との鞍

に喰い込んでいる沢の源で、稜線

雪庇が朝日に白く輝いている。

雪庇を左上に見ながら箕輪山のナ林に入り、これを斜左上に突きつて森林限界を出る処に(25)の標識ある。箕輪山のこれより上は一面

荒涼たるウインストラストの雪面で、太洋の波浪のようほ雪面の処々に、エビのシップホをついた枯木のクロテスクは姿が矣往している。凄惨な姿である。彼方に磐梯山が眞白なピラミッド型に立ち、ふり返れば一切絶、東吾妻の山々が並んでいる。地図一六〇〇五一〇〇水の等高線に沿うように箕輪の西側を掩き、入り込んでいる数本の沢の渓頭を越える。途中雪庇のため通過に骨の折れる処もあるが、最後に地図一五六七米のピークの手前で大きな谷が喰い込んでいる縁に沿って左に廻ると、箕輪山の西南の肩に出る。だ、広い世の平あたりで、先月二人遭難したそつてある。見事ほ樹氷が現われた。我々の目を擽しませてくれる。やつと⑦の標識を見付りほゝとする。この辺で吹雪ヶれたら一寸方角ヶ分るまい。更に登りきつて急に風を感じたに思つたら愈々稜線である。直ぐ前に鉢山、安達太良山、船明神岳の前に鉢山、安達太良山、船明神岳の前に鉢山、安達太良山、船明神岳の前に鉢山、安達太良山、船明神岳の前に鉢山、安達太良山、船明神岳の前に



雪煙が時々視界を奪う。休む間も早く鉢山の西側に滑り込む。鉢山は昨秋見た嚴然たる岩の城の姿の代りに、雪と氷の城郭となっている。怖れていた西の強風が既に暴れ出してあり、吹き曝しのアイスバーンの西斜面を歯を喰

いばしてトラワース気味に登る。岩の斜面に積った雪の急斜面で、大部疲労した猿崎君が二三度転倒しや、遅る、やっこ鉢山—安達太良の稜線に出る。猛烈な勢で風かぶつかつてくる。耳さかすめる風が異様な

吼をあげる。雪煙の合間に、くうかね小屋が左下方に見え、そこから登って来る人が風が強いからと此處から引返して行く。我々は後線の東斜面を稜線に沿って進もうと相談して進みにした。岩の急斜面に積った雪は急ほんに安定期で間もなく足下の雪が崩れて危く転落しかける始末、あきらめて角の先程の稜線に戻る。吹きつける雪がついて見えなくなつたコーグルを外しながら、ちらりとくろがね小屋への退年を考える。篠崎君を顧みる。真黒なス谷に入り、粉雪の大斜面にS字のシエプール（但し刃々に濁糞の附録あり）を画いて快適な滑降が続く。

風の余り当らぬ処まで降りて大休止。つまり上げたようほ安達太良のピックをふり返っては、やって良かったといつ満足感がひし／＼と胸にこみ上げてくる。

更に滑降は続く。烏川飯小屋近くは横滑り、階段式しか手がなくなる。烏川でくろがね小屋からの道とぶつかると、直ちに足スキー場への切り開きがつくなる。馬の背を夢中で通過、安太良山の岩峰の下に身を押し込んだは一時少し過ぎである。

岳から登つて来にニパー・ティのスキ

ラス谷へと降りて行った。空腹で大部バテ、いた篠崎君も、こゝで震えながら弁当をパクついて元気回復。カラス谷を目指して滑降に移る。暫くはテラテラのアイスバーン上と、相変わらずの風に後がら押されての滑降なので手こするこ甚しい。やゝカーレ状のカラス谷に入り、粉雪の大斜面にS字のシエプール（但し刃々に濁糞の附録あり）を画いて快適な滑降が続く。

風の余り当らぬ処まで降りて大休止。つまり上げたようほ安達太良のピックをふり返っては、やって良かったといつ満足感がひし／＼と胸にこみ上げてくる。

更に滑降は続く。烏川飯小屋近くは横滑り、階段式しか手がなくなる。烏川でくろがね小屋からの道とぶつかると、直ちに足スキー場への切り開きがつくなる。馬の背を夢中で通過、安太良山の岩峰の下に身を押し込んだは一時少し過ぎである。

岳スキー場は処々土が広ていう、う哀れな状態だが、それでも「」とどりの服装をしたゲレンデランナーが百人位樂んでいた。

さて、岳の温泉街に着き、お湯をまかしておけとばかり例の（深6号）共同風呂に案内し、人気のいのに気を良くして湯加減も見つに飛び込んで驚いた。そのゆるいヒー道理で建物の中が荒廃している思った、殆んど使用していないらしい。私が寝てゐるのを戸口が見ていた篠崎君は気を利かして近の旅館に聞きに行つた。間もなくお湯に入るだけなら無料でいいのですよ」という声に、「ぬるい」と、もんだよしとやせ我慢して私もとうとう今一度服を着直し旅館の、今度は本当のお湯に入り、やっと快心の笑みを洩らした。

野地（セ・ロ）一鬼面（輪郭）なく岳スキー場の上部に登じ出す。

ヘコース・タイム

雪庇の下（ハ・一・〇）—箕輪山中腹<sup>25</sup>

八・四・〇）—箕輪山西南脇<sup>17</sup>（一・〇・一・〇）

—鉢山西側（一一・一・〇）—安達太良

山（石一・〇・〇着一・三・〇出發）—大休止（

〇・四・五）—鳥川（四・〇・〇）—岳オニス

キー場（四・三・〇）—岳温泉（五・〇・〇着

七・二・〇発）リニ本松駅（二・二・〇発）

↓大宮駅（四・四・〇）

へ註▽

(1) このコースは土湯からなら野地、岳  
からならくろがね小屋で一泊となろ  
う。下りの滑降は岳への方が樂しめ  
るよ。

(2) 這是鬼面山—鉢山西側が吹雪いたりガ  
スかか、たりすると分りにくい。  
夏道の稜線はむき出しで堅いシユカ  
フラを形成するためずつと西側を捲  
いている。標識は少數だが、径30cm  
位の円板に赤地に白の数字がついて  
いる。（地図参照）

(3) 猶んと連日午後は強い西風が吹く。  
特に吹き揚しとなる箕輪山中腹、馬  
の背は午前中に通過するようにした

## || 隨想 ||

### 雪女のことなど

### 辻宏視

見渡す限りの銀世界に心躍らせたス  
キーシーズンもようやく幕が下りよう  
としている。今シーズンは雪か少し少  
いと空を睨んでは長嘸鳴いた会員の  
皆様も結構何処かで雪を見付けては滑  
っていたようだ。

雪山には夏山とは違った別の魅力が  
ある。神祕がある。不気味さもある。  
まあ想像して見給え。さっき迄の吹雪  
が止んで煌々たる月影のもと、樹木群  
の真中にたゞ一人立たずんだ自分の姿  
を。足もとの雪は青くすき通り、少し  
の風にも粉雪はさら／＼と斜面を滑り  
光りながら寂寥の中に唯一の音を作り  
出す。すべてが透明で、それでいてそ  
れらの陰影の深さ。こんな時に或る樹  
木の陰からスーと雪の靈氣の凝った  
雪の精。かくて未ても不自然には感  
じないであろう。

こんな中に半年近くも閉ぢ込められ  
る人々の間から雪に絡むさまざまな  
伝説が生れるのも又当然だろう。  
すき通るよつは、純白は、苛酷は  
凍てつくもの（眞の美とは結局こ  
んなものであろうか）を昇華させて  
雪國の人々は雪女といふ傑作を生ん  
だ。妖怪然とした雪の横たたモノス  
ター、陰うつた霧回氣から人々は一  
つ目、一本足の雪入道や雪坊主をこ  
しらえ育てた。これらのはものは猛吹

雪の日など、雪の重みで屋根裏がミ  
シ／＼いう夜半、薄暗い灯の下に之  
ぶる囲炉<sup>いろり</sup>を囲んで父から子へ、祖父  
から孫へとホソ／＼と語り伝えられ  
て行くにはほんと相應しい題材であ  
ろうか。

そのスター格である雪女は、一般  
的には「深夜雪道を歩いていると何  
処からともなく現れてその人をあら  
ぬ方向に導き凍死させる」と伝えら

れている。が、こんな訪をする地方もある。やはり深夜雪道を独り歩いていふと、雪火のついたようは、涙く赤ん坊を抱いた雪女が現れ、代りて抱いてくれと強請む。怖しこの余りその赤ん坊を抱くとそれが急に鉛のようにな重くなり赤ん坊とともに雪の中に深く沈んでしまうといふのである。これほどは吹雪の夜、所謂吹き溜りにあやまって落ち込み、もかく程深く沈んで遂に疲労と寒さのために凍死した人を、翌朝通りか、つた人が見付けた時に、こんな想像も生れてこようと領ける。

この話は私には何故か海の怪伝説幽靈船が思い出されてならない。即ち暗夜船かじつに会い危くなると、船の周囲にやはり崩て死んだ亡者共が大勢集ってきて（亡者たけは闇夜にもほの白くボーッと見えるという）、約子を貸せ、約子を貸せとわめき強請む。船乗りか怖しさの余り船に備え付けの約子を貸し与えると、者共は皆その約子で海水を船に注ぎ込み船を沈めてしまふは雪女についてこんなことを書いてゐる。姑の嫁いじめの話であるが、つゞきに辛く当る姑が或る雪の夜、嫁のかした過ちを怒り嫁を追い出して門を閉ざしてしまった。若い夫にはこうした妻を守る愛情も力も無かつたので見て見ぬ振りをして寝てしまった。と枕もとで自分を呼ぶ妻の声がする。声に誘われて外に出て見ると白装束の妻の後姿が先に行く。急ごうとしても足が重くなかなか追いつかない。やっと追いついて妻を抱き上げると冷たいばかりで、妻の姿になつた。食へないで劬いてくれるのだからこなは有難いことはない。どの男は大満足である。

ところが不思議に米藏の像が大変な減りようである。まるで十人の家族で食べているよつたのだ。やがてもう一つの不思議を男は発見する。雪の降り積る夜になると妻が夜半に床を抜け出すのである。屋根が雪の重みでミシク鳴り、天井が歪み垂れそつた深夜、男は妻の寝と気付か

うといふのである。ほどの用心に全く船には底の無い約子が形式的にでもあれ備え付けられているものである。

雪と文化らといふ本の中で阿部靜枝

われては白銀の世界を果てしなく喰きさまよつてある」というのである。雪女の巻端をえがいて哀れである。

一

雪に閉ぢ込められ、雪に埋もれてほそぐと暮す生活には、物資の不足と、その不安から生じる物に対する深い執着も生れよう。「いくつになっても嫁をもらわぬ男かいた。美しい女も賢い女も嫌いだ」と、口の無い女を欲しいというのだ。或曰「口のない女がひょくり現れてその男の妻になつた。食へないで劬いてくれるのだからこなは有難いことはない」と、男は大満足である。

（16）

れほいよに追つた。妻は米藏から米を出してきて炊いた。そしておもすひ

といくつも作っていると周囲に足音もなく雪入道や雪小僧が集つて来る。の

べらぼーて日暮も口もない入道や小僧がどうしてあのあますじを食べるのかと男は俄かに怖ろしくなり魂も冷え

切つてこの様子を眺めた」という。

怪氣ヒュー・モアの中に、各ん坊と深夜の歩きを戒めているのでもあう

が。阿部静枝氏は宮城の出身である。しかし私は雪女を書いての最高の傑

作は小泉八雲の雪女だと思つ。雪女に

若い人间味を持たせたことがその因であつう。元来日本の幽靈類は支那のそ

れと違つて人間味がなく、たゞうちめ

しく怖ろしいのである。しかしこの雪

女だけは違う。一人の好青年を殺すに忍ひす。生がして歸すのみならずその

青年を恋してその妻となり二人の間に

十人の子までなすといつのであるから

全く愛すべき妖精である。こゝに於て私は冷たい雪女感からずいヒ脱け出し

ホツと暖い吐息を洩すのである。(完)

## 霧ヶ峯スキー・ツアーゼ

(その一) 池のくるみー車山ー白樺湖ー南平ー大石崎ー親湯

……一月十九日、山縣昌彦・辻勝四郎・篠崎介二

(その二) 強清水ー車山ー白樺湖ー八子ヶ峯ー親湯

……一月二六日、柿沼博・山縣昌彦

(その三) 強清水ー車山ー蝶々深山ー物見石ー八島池ー入平ー秋倉

……二月九日、山縣昌彦(単独)

(その四) 強清水ー車山ー白樺湖

……三月二日、村田俊満・斎藤良則・亀江貴之・(他一名)

夜行日帰りで可能なスキー・ツアーデとして霧ヶ峯一帯は最適なもの、一つではなかろうか。

先ず上越地方に較へて雪質が良いこ

と、それに上越線のあの混雑にびきか

え中央線が樂に乗れる(三時前に行けは大抵坐れる)こと、ハケ缶は勿論のこと、南・中・北アの連峯が手にど

るよう一望出来ること、広大な緩斜

面が一面に統き、何一つ障害物のない

一帯に、数多くのスキー・ツアールー

トをどれること、そして一旦ケレンテを離れ、ばた、广い雪原に殆んど人影を見ないこと、裏日本と異り晴天の日が多いこと等々。

難と言えは、積雪が遅く又他のスキー地に較へて少いことだが、道木の少い草原だから一米もあれば十分最適期であろう。斜面が緩くて物足りないかも知れないが、歩いたり滑ったリという山スキーの練習には手

頃であろう。ケレンデで制動回転ぐら  
いまで出来るふうには、たら、混雑す  
るケレンデにさゝこと別れを告げて霧  
ヶ峯あたりで山スキーへ入内すること  
をお勧めする。卓山迄はシールの要ら  
ぬことが多いが、やはり原則的にはシ  
ールを用意すべきであろう。溪谷の  
どこにいくつかのルートのほか、茅  
野から白樺湖へ直接バスで入れば、  
蓼科山、及び蓼科牧場を経て丸子、  
信越線に抜ける蓼北高原ルートも夫  
々夜行日帰りが可能と思われ、耄年  
やってみたいと考えている。（以上  
M・Y）

### （コース・タイム）

（その一） 快晴

新宿（ニ三・五五）—上諏訪（六・〇五  
着）—六・三〇登）—清水橋（七・二〇）  
—池のくるみ（七・三五着八・〇〇登）  
—車山頂上（一〇・〇〇着一〇・四〇登  
）—白樺湖（一・〇・〇着一・三・〇登）—  
南平ヘテエ牌（三・一〇）—大石平峠

無い上に雪が少く、ブッシュが出て  
いるため苦労した。

### （その二） 晴後雪 風強し

（三・四〇）—親湯（五・一〇着六・一〇登  
）—茅野（七・二〇着）—新宿（  
着）  
（註）車山から白樺湖へ下る途中で一  
人足首を痛めたため、予想外の時間を  
とった。大石平峠から親湯へ下る径は  
（三・四〇）—ハチケ峯（三・〇〇）—親  
湯（四・二〇）

（註）ハチケ峯の尾根は長い。小  
さく上り下りを繰り返して尾根を  
辿るのは山スキーのよいトレーニ  
ングにはなる。風には相当に、かれ  
た。

### （その三） 晴

強清水（九・四〇）—車山（一・〇・四  
〇着一・〇・五五）—蝶ヶ深山（一  
四・〇）—物見石（〇・一・〇）—東保  
滑降路入口（一・三・〇）—大平（四  
・一・五）—萩倉（四・四・〇着五・〇・五  
登）—下諏訪

（註）東保滑降路を期待してい  
が当日朝まで降った新雪のため  
キーはもぐるだけで一向に滑ら  
三〇分の快適な滑降の予定が  
こま時間近くかってしまった  
を画いての大滑降である。余り早



全くアルバイトである。たがつしても踏まれていれば、曲りの快適な滑降がある。

（その四）濃霧後晴

強満六一車山

## 池のくるみ一車山一

### 南平—蓼科温泉ツアーリ

〔前記（その一）の記録〕

#### 篠崎介二

疲れの夜汽車と上諏訪で降り、駅から一寸戻ったバス発車所で清水橋行きのバスに乗る。

終点で降り、スキーを肩にしまって雪を踏むこと暫く、リフト乗場に出る。これに乗って池のくるみスキー場に上る。快晴の空に太陽が昇り始め、白銀の世界がまはやく、気温は5℃以下か、寒氣はきびしい。

小屋で朝食をとる。茶代はと聞けは番頭さん（は無料）とい、小母さんは

車して外に出る。がほりと踏まれて、のでスキーを間に受け登り道を車山へ向う。奥日本平アの山々が姿と現れてくる。此處よりは一面松原のスロープで、向翅から何処までかケレンテビ、いつ兎もなく丘に滑り廻れう。

車山の西側もさへて我々は車山へて湖側に向向をとり、車山から南へ出ている砂岩にをりつくことにする。新雪た面が遠に守のシユブールを引いてやくの足跡待ちのものだ。

車山の西側の谷を越え斜めに尾根へ登る。尾根からは東北に車山へ真直ぐ登る。風景小さく、すこて近くに見えたのが峯に達し、二時間ばかりでやがて車山頂上に着く。此処の展望は絶佳、日本中部の山々が雪を被ってぐるりと見廻せる。

シールを外して、滑降、車山乗越へ下る。滑り下るのは少し急なので敬遠し、西寄りの斜面と斜面キックターンで下る。などは人気のない大斜面とトロートは忘れられはしない。（完）

下りてしまい、モケ体験ないと追付。轟鳴で大休止。実は丁さんが足を痛めたのであるが、何とか白樺湖まで下る。此處で丁さんと別れ、丁さんと二人、スケーターの群かる白樺湖を渡る。最初の計画ではハチケ峯と越えるつもりであったが、

時間がないのでハチケ峯の裾を廻って南平を通って行くことにする。かなり長い径だ。途中ベテエ神という處に清水が湧いている。シルをつけてのラッセルにや、ハテる頃、ハチケ峯と蓼科山の鞍部に、当る大石平峰に着く。こ、から親湯への滑降は径幅も狭く、ヤフもなく曲りくねっているので転倒また転倒の悪戦苦闘、やっと親湯へ着いた時は日も落ちてあたりは薄暗くはっていた。

親湯は沸し湯ではあるが清潔感は豊富な湯で、客も少く快適である。（入湯料30円）。大石平峰からの下り、ふり何にて見た蓼科山のアーバントロートは忘れられない。（完）

# 三月の谷川岳

## — 西黒尾根 —

吉田泰彦

(其月ヨ) 三月二日 (曇時々晴)  
(MEM) 辻勝四郎・吉田泰彦

じだ。実際こんなに雪のあるときの谷川岳は始めてやあつたので、登る途中も内心ひやくしたものだったか、いざ頂上に立つて此の素晴らしい眺めに接すると、登りの苦労など忘ち忘れてしまふから可笑しなものだ。今回は珍らしくキャラメルを持って来たが、さすがに美味しい。マカロニもあった。辻さんは前に溪稜説上でマカロニは嫌いであると表明しているのでどんなものかと見ていたら、さすがに腹が減つたと見え、ぱくぱくやついていたが、少しご残して面目を示した。肩の小屋は屋根にワグリーンの頭を出し、周囲の雪の白さとの巧みな配色は印象的であった。色が鮮かといえは溪稜の旗も良かつた。辻藤さん苦心の、あの地の赤色は一本五〇円のみやう染めとはどうしても見えず、愚かな溪稜の連中を欺くには十介である。それにしても冬の山は雪の白を基調にしてどんな組合せても見事な配色となる。チャイコフスキイは山野を散策するのを好みだというが

じだ。実際こんなに雪のあるときの谷川岳は始めてやあつたことだらうと思つ。とかくするうちにこの山特有の天候、いつのまにか粉雪が舞い出しへ接すると、登りの苦労など忘ち忘れてしまふから可笑しなものだ。今回は珍らしくキャラメルを持って来たが、さすがに美味しい。マカロニもあった。辻さんは前に溪稜説上でマカロニは嫌いであると表明しているのでどんなものかと見ていたら、さすがに腹が減つたと見え、ぱくぱくやついていたが、少し残して面目を示した。肩の小屋は屋根にワグリーンの頭を出し、周囲の雪の白さとの巧みな配色は印象的であった。色が鮮かといえは溪稜の旗も良かつた。辻藤さん苦心の、あの地の赤色は一本五〇円のみやう染めとはどうしても見えず、愚かな溪稜の連中を欺くには十介である。それにしても冬の山は雪の白を基調にしてどんな組合せても見事な配色となる。チャイコフスキイは山野を散策するのを好みだというが

こういう冬山の眺を見たらどれ程優れた音楽か出来たことだらうと思つ。とかくするうちにこの山特有の天候、いつのまにか粉雪が舞い出しへ接すると、登りに苦労したくてある。

西黒尾根も冬にはほかくの勾配の雪尾根で、一步一步慎重に下る。ラクダの背の手前の岩蔭にワカンとストックが置いてある。こゝまでが登りに苦労したくてある。

本来は殆のから西黒尾根を登るつもりである。たのむ、土合駅へ降り立つた時、吹雪だううと予想していたのに意外にも頭上に星の光を認めて気を許し、い、気になつて詰しながら歩き始めた途端に雪の深みに足とどられて横転、その時懐中電燈の球を切つてしまい、西黒尾根の取付が見付からぬいま、にマチカ次出合に着いてしまい、止むを得ずマチカ次を登ることになってしまった。にわたりた。深雪に悩まされながら、ワカンとストックでラッセルを繋り、ニノ次

稍を押し広げるよつに吹いていた。

（コース・タイム）

土合（ニ・五〇）—マチガ沢出合（四・四〇）—ニノ沢より西黒尾根（ハ・四〇）—谷川岳頂上（一・〇・五〇）—土合（二

四〇）

寄りにルートをとる。  
近年冬期の谷川岳にも結構人が入るようになつたので、休日などは西黒尾根はラッセルに苦しむことはない。

我々はマナカ沢から尾根の取付までを輪カンとストック、あとはアイゼンとピッケルによつた。我々は四本爪のアイゼンで登つてしまつたが、あの急な西黒尾根がアイスハーンとなる時期には危険千万なことだろう。装備は出来る限り完全なものにしよう。下部森林帯におけるあの单调さはまぬがれない。我々はマチガ沢から登つたがヴァラエティの良からはこれもやはり喫められるルートである。

マチガ沢にはあまり雪崩の跡は見られなかつたが、ガレ沢には中広い表層雪崩の爪の跡が見られデブリは本沢まで達してゐた。しかし正午頃からマチガ沢には数個所小さな表層雪崩を目撃した。天候は夏以上に変りやすく頂上附近では晴向を見たが商もなく強風が吹き始めて雪が降つて来た。交通機関の混雑が悩みであるが、冬山のオ一課として恰好のレンテである。

方の末や、ヒ西黒尾根に抜け出したのめる。そこで一休みしている我々のオーヴァーシューズにハ本爪アイシンの数名のパートナーが元気に通過し行つた。我々はピッケルこそあれ、キー靴に軍靴、それに四本爪のアイゼンとは、何ともお粗末な恰好では、に、それにカメラだ。俺も止こんシカメラには餘がほしい。それで例の巣高自慢の力でうき惜り受けつて大夢におもいたくいて来たのに分へ尤ももうこちらはいよいよ苦心して何枚か撮つたものだ。

カレズ、アンケ沢あたりで小走り

屋敷地が立つていて、マナカ沢にはそれらしいものには見えなかつた。さて森林帯に入る前でも一度頂上に帰り返ると何も見えず、隣りのシンセンの水盤もマナカ沢も白いカスでかくされて、たゞ強い風が足元の木の

積雪期谷川岳の一概的ほルートは夏期と同林西黒尾根である。たゞ夏と同じように下部森林帯におけるあの单调さはまぬがれない。我々はマチガ沢から登つたがヴァラエティの良からはこれもやはり喫められるルートである。西黒尾根の雪庇は西黒沢へ張り出している。（同林にシンセン尾根の雪庇はマチガ沢の方へ張り出していた。）たゞこの尾根の雪庇については余程の時刻に限り、その危険性を考える必要はないだろう。

頂上附近では雪庇はマチガ沢上部へと張り出している。此処では肩の広場

# ドゾードピーピーの工間の山にて=



## ヘオ一話／山男の胃袋

T・M

数年前、我々のホームグラウンド

谷川岳での一駒。

その晩はカレーライスの献立で食卓は非常に賑わっていた。然し今から想うと極めてお粗末なカレーではあったが（その時の炊事当番も失礼！）その当時は麺を食塩を少しがけただけの飯を食って満足していたから、カレーともなればどんなにお粗末でも最上の献立てであった。

しかも各自の食器にもられたカレーライスの片隅には夫々福神漬が一つまみずつ添えられてあった。昼間の活動に疲れ、皆腹の虫が運動会の最中、いくつかとほされたりシタンの灯が、まさにばくつかんとする人々の円陣を照らし出している時刻である。

忽ちカレーライス、福神漬は平らげられ、満足した我々はテントにもぐり込んでぐっすりと眠りについたのである。

実は問題はこれからである。翌朝、目を覚まして顔を洗いに出ると、テントの脇に見ほれぬ小樽か置いてある。はてはと思い、蓋を取って覗いて見ると福神漬が三分の一程入っている。ハハーン、タベのは、これだね、それにしてしも良いものと拾って走った。と思いながら早速一口いたゞこうと指と突っ込んだ。

ところが、どうかである。樽の中のおつゆの中に奥々と無数に浮いていた胡麻が一斉にすっと沈んだのである。

おや、と顔を近付けてよく見ると、胡麻と思ったのは何とぼ、ふらだったるのである。

昨夜食ったカレーライスが咽喉まで出かへつたが、もう手遅れである。昨夜の炊事係の奴がうらめしいが皆に知らせるのも氣の毒にと思って思案しているうちに朝飯とほき。

知らぬが仮の炊事係はいそと又福神漬を皆によそって行った。あ、そして、哀れな顧問を始め信太は胃袋を持った私以外の諸君は再びぼくらの胡麻入り福神漬を平丁てケロリとしていたのである。

ぼくらの靈よ 安かれこれ以後は、そこいらで拾った食物はよく吟味し、良く洗って食べようにはった次第である。

# ヘオニ話／バンドを拾つ話

T・M 生

なく、置かれていたのである。

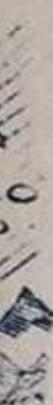
やはり谷川岳でのお話。暑い午後をもてあましてマチガ沢の雪渓から雪でもかいて持つて来ようとH・S・K・三君、飯盒片手に出かけた。ベースから出て直さに左岸の岩の上に女物の細いバンドが落ちていた。目の早いH君早速拾いあげ、「そ、つかしい奴だ、逢うかも知れないから俺が渡してやう」とにかく女性のものらしいからな」と、自分の腰にぶら下げる。

その時、傍の灌木の茂みの中でカサカサという物音が起つた。三人、一瞬ギクリとその場に立ちすくんだ。

オヤジ（熊）か？ 鬼か？……いや、ヤブの中からは一人の妙堅の声人が現われ出したのである。

三人ホソと安堵の溜息を洩らした途端、その御婦人はH君に向つてあつしやつたのである。

「あのう、そのバンド、私のほんてす」「ど？」つまり、ハントは落ちていにのては



ヘオニ話／リングスワントーリング

K・T 生

山男は山でばかりではなく、時には下界でも迷い歩くものである。

YとTは十日を越える彼等の長い山旅が終ると、列車の乗り換えの合間にM市を早速一風呂あびることにした。

まず一ヶ何円かの石諭を買ひ求める

と彼等は町中に立た、風呂屋を探すのに彼等は煙突を目当てにしたものだ。

廻かいざその煙突を掩し当て、近付いて見ると、それが旅館であつたり、町工場であつたり、豆腐屋であつたりする、かくして彼等は山廻の町としては

い始めたというわけだ。

かほり歩きくにひれてから、彼等は

口で訊くのが一番早いといつ真理に気が付いた、然し何しろ二人の恰好とき

たら、山の中でならともかく、螢光灯

が譚き、ラジオが鳴っているこの

町中では、ザックを預けた手からであるたゞに、いかにも異様である。特にTのクタビレ果てに地下足袋は、特創意をベタベタ張つて辛うじて剥がれ目をふさいである。

道端で遊んでいた少女をつかまえておずくと訊いたものだ。出来るだけ優しい顔と声で……怪訝そうな顔で然もその子は風呂屋を教えてくれた。

ようやく待望の湯に飛び込み、溜つた垢をすり落して豊胸を仰ぎながら外へ出た。

今度は迷わないようとに、方向を定めて何歩もいかぬうちにやれやれと思ったものだ。何と其廻は彼等の長い彷徨の出発点であるM駅のすぐそばだったのである。

以後彼等は町の中でも地図と磁石を持って歩くことになるにどう

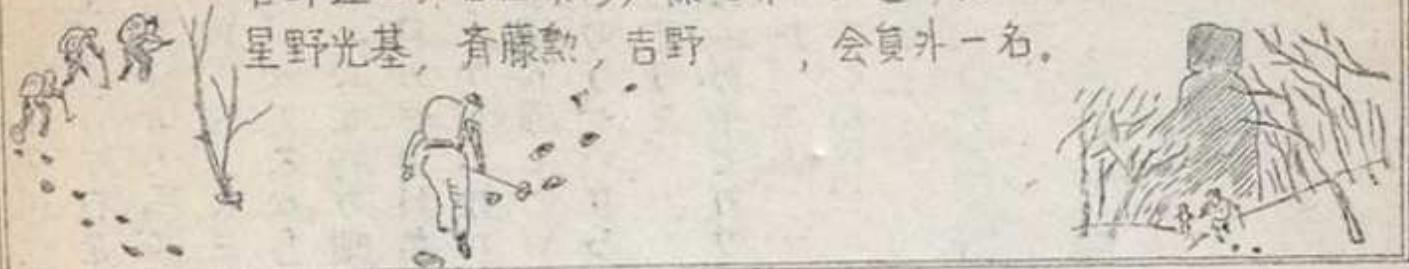
# 春季合同山行記録：春の吾妻耶山

— 龜江資之一 —

〈日〉3月21日（晴）

〈コース〉上牧一大峯沼一大峯山一吾妻耶山一水上

〈MEM〉 L 筒井滿栄；柿沼博，山縣昌彦，大武昭雄，吉野富子，管野達也，吉田泰彦，篠崎介二，龜江資之，齊藤良則，星野光基，齊藤勲，吉野，会員外一人。



満員の上越線からまだ暗い上牧駅に降り立ったのは我が溪棲のパーティのみであった。急な階段を降り待合室に入つて見ると、寒々としたベンチの上に、グランツシーツにくるまってYさんとKさんが浮浪者然と転がっていた。二人は昨日白毛円山をやり、昨夜から此處で我々を待つてゐたわけである。

一行十四名、手に手にピソケルやステッカを持ち暗い上牧の町へ出る。

利根川にかかる吊橋を渡り、小和知部落にさしかかる頃、ようやくあたりが明るくなり、行く手に白く雪をつけた大峯、吾妻耶の山々が現れる。平坦な全くのハイキングコースを暫く辿るところ松に着き、早速「メシ！」といふ声をあげる。朝食。

もう三月も半ば過ぎてあるが、此処上牧の夜明けはまた／＼寒い。少し雲はあるようだが、東方のガスか次第に薄れ、刻々と彼方の山はみが姿を現してくる。ます／＼天候は大丈夫と娘ひ

あう。こ、から五六介て古ひた神社があり、すぐ脇を水が落ちてゐる。今までには思い／＼にのんびり歩いて来たが、ラッセルに備えて先ず元気のよい若手がトップに立ち年令順にオーダーを組む。気持ちよい唐松帶を、前の者の踏跡をとらえて行く。雪の表面はまに凍つていて、それでも時々膝までもぐる。

やかて明るく開けた凧を通り過ぎ再び樹林帯を進むと向もなく右手に吾妻耶山への指導標がある。これを見送って少し進めは大峯沼である。沼の周囲にはハンカロー、や休憩所らしい建物が立っているが、沼はまた一面結氷しており、我々の外には誰も居ない。静寂がこの白い世界を支配している。

吾妻耶山だけぢやつまらない、大峯山へも登つて行こう、といつ

ミ少し右に進み、正面に横たわる大峯の尾根へ直登しようということになる。大体もう此辺いらはひしり雪に覆われていて踏跡もなし、どこかルートが分りやしない。

尾根までの斜面は凧々に岩の出にかなりの急斜面であるか、サックを背負わず会旗をつけたストックたりを持つたY顧問の「それ！進め！」の号令に、若手がら登り出す。壁は柔かく、バス／＼と股までもぐるか、大した距離でもなさそうなのでワカンもつけず強引にエツサ／＼と登る。途中丁女史が急斜面で転かり、一同はつとしたが、綺麗に一回転してホソフと雪にうま、て止った。さすがに見事であると一同感心する。

向もほく稜線に飛び出し、着不の間から白く光る大峯沼を見下ろし、から小こは登り降りをいくつかくり返すと大峯山頂である。はるかに湯曾川、水上の町が望まれる。一行の中には三時の水上發で歸りたいといつのも居れば、そんばに早く帰る

のはいやだといつものあり、ともかくまと吾妻耶山へと向う、途中怪しきよつだつにか向もほぐ吾妻耶山頂に到着。頂上は土台が雪に埋れた小さは石の祠が三つ立、展望はまことに良く谷川連峰を平標、苗場山まで一望に見わたせる。天気は上々、風もなく、シヤツ一枚にはつた者も居るくらいに。

今迄耐えて来た空腹を満たし、のんびり日向ボンコロを指參のコンソメスープ介大好評で、ラチウスで雪と融かしてはコツフェルニ一杯スープを作り御馳走にする。のどかな談笑。

Kさんの方メテ記念撮影の後、一時十五分下りにかゝる。深い雪を踏んで尾根を西へ辿り、向もなくがほり急な瘦尾根を下る。岩と雪の急降て一寸いやな処があるが、

用意の補助ザイルを使って女性をいたわりつ、無事に下り、向もなく仏岩に着く。この辺の方か雪も深く、かほりもぐる。前の人の中踏跡に足を置くとホソノと脇までもくり、やっぱりあいつより俺

の方が重いのかな、とブツ／＼言つてゐる者も居る。

仏岩は確かに坐つた仏様のようほ形をした岩塔であるが、丁女史を含んだ三、四人か忍び登つてしまつたところを見ると大したこと

もほいらしく。

更に深い樹林帶の中を雪にもぐりながら抜けると雪も次第に減り阿能川に沿つて重い足を引きすりながら水上の町に入り、お湯に入れないと、ヒコボシ御内達を引き立て、五時少し前に駅に着く。列車は意外にもガラ／＼てあ、たのは有難かつた。



# 三月の仙丈岳



仙丈の登りにて北岳を望む。

柿沼博

（日）三月二七日～二九日

山縣昌彦

ヘオ一日／ 曼

三月二七日、ねぼ丁眼で早朝未明の伊那北駅に降り立つ。ガランとした待合室は寒い。我々二人の他に若い二人のパ・ティと、高校生とその〇・八らしい五、六人のパー・ティがやはり大きなザックをかついで降りた。戸台行きのバスを待つ間、駅のベンチで震えながら握り飯を食べる。

バスは去年の夏通って見覚えのある道路を通って高遠を通過、三峯川に沿って走る。見ると道行く人は傘をさしている。とう／＼降つて未だらしい。まあ、明日晴れ、ばい、と慰め合う。途中のダム工事も相当に捲り、すでに三峯川もせき止められて水を湛えており、高遠湖の複讐が目につく。附近の山々は雪がなく垂れこめている。バスは戸台口で三峯川と分れて左折し戸台川に沿つて七曲りの道を快調に走る。終点戸台に着いたのは七時四十五分、或いはバスは戸台口までではないかと思っていたのだが、戸台にも雪は全

くなく、夏同様此処までバスで来られたのは有難い。

バスを降りてみると、又未だほとの感を深くする。

戸台川の岸の戸台山荘に寄り、

お茶をもらつてゆっくり朝食をとる。長衛さん（北沢長衛小屋の主）が先月亡くなつてその葬式が

先立つてすんにところに廻かさ

れる。この頃より雲も切れ、周囲の山々が朝日を受けて照り映えてきた。やはりツイテいるらしい。

薄着にして出発。此處より丹後山荘までは戸台川の河原のゴーロ歩きてある。雪は全くない。大きなザックが肩に重い。丸木橋を渡り、昨年テントを張つた地図を過ぎると前方に双兎山、駒ヶ岳が立つ。朝日に輝かせて美しい姿を現して来た。その姿にひかれるように快調に歩みは進む。再び右岸に渡り、朝方戸台山荘に居るとき足音も高く通過して行った高校生の

—テイを追抜く。木蔭に廻々残雪を見るようになる。周もよく二人づれのテイも追抜く。我々は二人ともシリシリ汗ばみ乍り、左手に錫云の突とした山容を仰ぎ、次々に高度をげる。南アの浴場丹溪山荘、と岩に。ソギで書いてあるのが处处にある。印入りであるのには一寸驚いた。にう／＼坂を登りると赤河原と葛沢の分岐点に丹溪山荘が立っている。石塁の堰堤よりたぎり落ちる水音が

耳持よい。小屋の入口に吊してある登山者名簿に記入し中に入つて昼食。窓

から見上げる八丁坂も雪は少いようだ。場合によつてはオ一日は此廻泊りとも考えていたのにまだ正午前である。あ湯は帰りにしようと北沢峠へ向けて出發。八丁坂にかかると樹林帶の雪が徑に凍つてゐるのである。先行のYさんはNo.6つて登りにくい。先行のYさんはNo.6の鉢にものといわせてぐんぐん登つてゆくが、僕はビブラン底の靴をはいて来たことをグチリドラ、スリップに神経をすりへらしつ、登るへアイゼンを

出すのも面倒）。やっと八丁坂を登りまうと、深く足下に切り込む藪沢を隔て、仙丈ヶ岳より伸びる馬の背の尾根が高く仰かれる。

この辺より雪は一面を覆いつくし次オにその量を増してくる。かなり踏まれた踏跡を辿つて登るのに、一寸踏跡からすると股まで没する深さである。前に通つた人が落ち込んだのである。前に通つた人が落ち込んだのである。前に通つた人が落ち込んだのである。

（つづき）

峠への最後の登りにかゝり小休止。深い雪に埋もれて森閑とした樹林帶は一種神祕的だ。煙草かうまい。気温はかなり低く、汗が冷えてすぐ寒くほつてくる。出發、北沢峠がなかなか見上げる八丁坂も雪は少いようだ。場合によつてはオ一日は此廻泊りとも考えていたのにまだ正午前である。あ湯は帰りにしようと北沢峠へ向けて出發。八丁坂にかかると樹林帶の雪が徑に凍つてゐるのである。先行のYさんはNo.6つて登りにくい。先行のYさんはNo.6の鉢にものといわせてぐんぐん登つてゆくが、僕はビブラン底の靴をはいて来たことをグチリドラ、スリップに神経をすりへらしつ、登るへアイゼンを

でもくつて了つ。おまけ言ふ。  
仙丈への夏道の標識を見送り、しばらく下ると右側に仙丈走登山口書いた本片が不打ちつてあり、藪沢廻りの道は青木か故ア所ありを陥して注意書きがある。一筋の踏跡が登つて木立の中消えている。良く踏まれているらしいので安心に、更に暫く下るとや、角丁に凹地に長野小屋と北沢小屋が雪に半分埋れて立つてゐる。先ず無人の北沢小屋へ行ってみると、うす暗い土蔵に丸木が敷本くすぶり、ゴサモロイ床板の上にシユラーフ。食器類が散らばつてゐる。二、三人がかうりしたのが泊つてゐるらしい。汚いし、窓は破れても寒そうである。我々老体には尋ねてあろうと二人相談の上、一金一五〇円セを投じて長野小屋に泊ることにする。長野小屋に入ると暖炉火を囲んで五、六人の大学生が何が喰べ物を歌つてゐる。うるさい奴等だ。

上つて荷物の整理とし棚に並べていふと、冬期五の内堵の販り

紙か毎にとある。しまつたと思つ。

まに時刻も早ないのでシユラーフにくるまつて横になる。そのうちに我々が途中で抜いた二人づれが到着し我々の横に居をがまえる。

夕方食事の仕度に外へ出でみると、小仙大あたりから雪煙が夕陽に映えて舞い上り、ふり返れば駒の摩利支天の雪の附いた岩峰がアーヘントロートに輝く頭を一寸のそかせていたのが印象的であった。

夕食はシチュー、七時就寝。どれ程眠ったか、ふじ目を覺し、水きしきはしに外へ出る。裸りついた雪原、満天の星、はるかに小仙丈が銛い洋銀色の身を夜空に突き上げている。底知れぬ静けさ。時計を見ると一時半。再び小屋に入り、アセんの高々、低く続くいひをと聞く。汗を落した。

ヘオニ日／＼晴後曇夕方より雪

何か枕もどここそ／＼あるので自ら明りてみるとアセんが半身シユラーフ、左か真白はハントレスを朝日に輝かせ

から來り出してラチウスをつりてゐる。は、あやこるは、こちらは暫く狸をきめこむ。五時朝食、顔も洗わず食べる、味噌汁、玉子、ふりかけ、三つまい。隣の二人はもう出發した。

サックに各自必要品を入れ、僕はゲートル、アさんはオーヴァーシューズをつけ、アイゼンをつけて我々も出發。気温は低く、雪は固くしまってアイゼンが気持ちよく。

昨日見ておいた登り口から来る。しばらくは山腹に沿つただら／＼坂であるが、間もなく尾根筋に一直線に踏まれに直登コースとなり、傾斜も四五度近く、昇上する限り一直線に木立の中に突き上げてゐる。ザク／＼とコンスクントなりズムで前を行くアセんのペースは快速である。休みほく登る、一步步毎に高み行くのを感じる。汗を落すと背中をぬらし、額に汗となる。

木の宿からの展望も一歩毎にむりり、左手には野呂川の深い渓谷を隔て、北

の左には鋸の尾根が続く。木の間をもれる朝日が美しい結構林をうつす樹林帶の急登をなおも続ければ、やがて木もまばらになり、目もまばゆい白銀一色の世界が展開される。右下の藪沢より寒風が樹林をざわめかせて吹き上げてくる。この辺は信松帯だが、处处に頭を出しているだけで一面びっしり雪に埋もれてゐる。一寸した露岩で小休止。ここで我々より一時間近く前に出た二人のパートナーに追いつく。そろ／＼風当りも強くなってきたので身こしらえとし出發。雪面は固くアイゼンに丁度良い。オーブーフに飛ひ出すと始めて三十六度の展望が開ける。此処よりは巨大な白銀の馬の背のようほ尾根が大小いくつかのピーク

と経て延々と続き、直指う仙丈岳の頂上ははるかである。尾根筋に躊躇めた一切の踏跡を辿る。周辺は野呂川よらし。歩く度にアイセンに碎かれた氷片がカラ／＼と纖細な金属音を立て過ぎ。右下の鞍沢に落下してゆく。小仙丈と過ぎ、仙丈岳近くの若尾根で風は一層強くなる。尾根の西北側を抱いて行くか雪は風に飛ばされてびしり、岩肌が露出して表面は白い氷に覆われている。アイセンのツアッケは辛うじて喰い込む。周期的に襲つてくる寒風にピッケルで身を支えて慎重に進む。ここではされたり鞍沢まで落ちるだろつ、氷の裏場を過ぎ、ポケットから乾パンを取り出して口に入れだが、寒風で頭の感覚も鈍くなり、バサ／＼してほか／＼呑み込ぬ。Yさんは最後のピックに迫つて、頭には最後のピックを越えると仙丈岳の頂上は目の上である。轟石に大小無数の氷柱が凧りつき、ピューという強風にまじって飛んでくる雪片がビシ／＼と身体に当る。風

の合間に見て一気に頂上に登る。Yさんと感心の握手、とう／＼登った鞍の三千米峯に、九時三十分、北沢小屋の西北の方から白い雲が這つて来るが展望は三六〇度、北毫／＼海ノ岳から塙見赤石共、サヌマルブス、木曾御岳、北アルプスの山並み。方位盤の台の蔭に影をよりながら眺望を楽しむ。Yさんは早速溪穀の旅をピッケルにくりつけた。パラ／＼と猛烈にはためく、文路でこのマヌスルばかりの姿を記念撮影。

やっと先程の二人が到着も我々は下り始める。坂上直下の鞍部でYさんは木きしきを發はしてるので一寸先に行つた時、「あ」という声に何事そこつてみたら中は氷片がサラ／＼と一格になつていたのに驚いた。

北沢小屋まで下つて来た頃には、空はすっかり雲に覆われ雪模様にはつていて、全く無い時に登頂したも

雄大ほカールの下方に、ポソンと仙丈小屋がトタン屋根の一部を雪の中から覗かせている。

下りは斜め後方から風を受けるかとして困難もなく、眺望を樂み下り軽々と下りる。ふり返ると仙丈岳の頂上は時々雪煙でかくされていて、小仙丈から見下ろすと北沢の小屋が二つほつんと雪の中に小さく見え、更に仙丈岳まで白い筋が一直線に伸びていて、その筋の先端がYさんの足元にささつたんだそうだ。

小屋で火にあたり下り、二代目(?)長衛さんにいろいろ語と聞く、驚く

カモシカ、猪、等々親爺の記述は豊富

である。こう簡単では仙丈たりては身体ない

がう駒もやつてしまおつといふ計画も

御てたのだが、天気が怪しいので今日

は丹溪まで下り、ゆっくり、南アの浴

室、とやらを兼しもうと相談が詰まり

、早速荷物をソノクにふち込んで小屋

を出る。案の定、雪が降り始めた。我

々未だ頃子り、気温はかなり低くほ

っていいる。しかし、雪もよくしまり、ア

イソンとミガせてスタコラと一緒に下

りた。全て赤い例の二人連れて、此処をへてスにして鉛、駒をやつていらうらしい四人のパーティにてある。

### ヘオ三日、晴後雪

目を覚ますとまた雪は降つてゐる。

これでは最後の候補地とした錫釜も駄

目だと、へ時半戸台発のバスで帰ることにする。処が小屋を出て暫くすると

雲が切れかゝと曰がされて来た。しま

つた引返そうか、と言つてみたが、又

こから引返すのも臆却て諦めて帰ることにする。殺風景戸台川の河原も

、未だ時とは様相が一変し新雪に覆わ

れてきれいである。

例のペースでYさんは、これぢやあ八時のバスに向に合はせ、と飛はし始めトか、何と彼の時計は七時半で止つていたのである。

最後で右岸に渡る丸木橋では、雪の凍りついた鉢靴で渡り立したYさんは危ふく流に落ちそうになりながら最後の一歩詩りを向う岸へ必死の跳躍、争

予定通りへ時半のバスで高遠を通り、朝から雨び垂つた空からは雪がちんく降り始める。中間譲て甲府の五ヶ岳へ来る足降り続いていた。全く我々は感が良い、と二人とも満足した次第である。

### ヘコース・タイム

新宿(ニニ・四五)→長野(四・三九)→伊那北(五・四着、六・一五発)→戸台(七・四五着)戸台山駅(八・三五発)→丹溪山荘(一一・〇〇着、一一・四五発)→北沢峰(二・〇〇)→長工小屋(二・一五)泊。

### 長工小屋(六・三五)→豊水小屋へ

の介岐吳(七・五〇)→森林限界(八・三〇)→仙丈岳(九・三五着九・五〇発)→(昼食四〇分)→長工小屋(一一・五着、三・〇〇発)→丹溪山荘(四・三〇)泊。

丹溪山荘(六・三〇)→戸台(八・一)

五・ハ・三〇発)→伊那駅

ワカン・アイゼン（ハ本）・  
ピッケル・ストック・補助ザ  
イル・ラシウス 等。

但し雪はよく踏まれていたのでワ  
カンとストックは全然使わなかっ  
た。ザイルも万ーの場合にと持つ  
て行つたが、これも使わず。アイ  
ゼンはハ本爪が必要だろう。四本  
でもX型ならば間に合うかも知れ  
ない。ラツセルはしないからオーバー  
ーシューズ、ゲートルも無くて

も大丈夫と思う。

勿論新雪が沢山積つた時は状況  
が違うから、入る前に長エさんに  
聞い合せておくと良い。

山に入る迄は数日間、何年振りか  
の暖い陽気が続き、山に入った日  
がら寒波が襲つて奥東一帯に雪を  
降らせた。行動中はアンダーシャ  
ツ、木綿ギャバ織シャツとチヨン  
テで十分、棱線では薄セーターを  
重ね、ヤツケをかぶる、ゴーグル

はあつた方が良い。手袋は軍手で  
稜線ではミトンを重ねた。

### 三、その他

① 仙丈岳は冬期も登山者は多く、  
小屋の名簿を見たら、暮の二十  
九日から元日にかけて八〇人  
余が泊っている。かえつて我  
々の行つた時分り方が空いてお  
り、しかも正月頃は雪も少く日  
も短く、寒いだけで余り良い所  
ははないとのことに。

雪の多い時は、北沢小屋から  
小仙丈へ直ぐに突き上ける沢  
(スキ一沢と呼ばれる)をスキ  
ーで登降出来る。雪崩は余りは  
いそうに。

雪疵は我々の見た範囲では大  
しにものではなく、鞍沢側にいく  
つか出ていた。

ルートは大体夏道と同じだが  
文中にもあるように鞍沢小屋を  
通る径は便はないらしい。  
② 駒ヶ岳も夏道通り行くことが出  
来、仙丈と同様よく踏まれてい

るよつた。たゞ六万石あたりから上  
は西面のためか雪も少く、岩と氷が  
かほり出ているようと思われた。

③ 北岳は長エさんの話だと、北沢から  
野呂川沿いに西俣まで一日、西俣か  
ら残雪期は右俣が快適に登れるそ  
うだ。

④ 錫岳は丹溪の親爺さんによつて角矢  
卫沢に指導標が準備されている。錫  
から駒を目指すのも面白そうである  
。



# 1957年度会員山行一覧

昭和32年4月1日より33年3月31日までの、溪穀山岳会員2名以上参加  
及び単独行の山行のうち、会に報告のあったもの。☆印は前夜発。

期日	場所	コース	メンバー	会報番号
4. 10~13	西丹沢	同角沢、モチコン沢、ザノザ洞	辻(勝)、管野、田中(党)、吉田	No.2
4. 13~14	苗場山	湯沢-和田小屋-神楽峯	山縣、筒井、村田	No.2
4. 21	顔振峠	顔振-高山不動-川場坂	近藤(単独)	
4. 28~29	甲武信岳	梓山-十文字峠-甲武信-盧山	山縣、辻(勝)	
4. 29*	乾徳山	徳和-乾徳-里金山	松井、岩崎	
5. 3*	丹沢主脈	湯沢-塔ヶ岳-青根	大武、田中(党)、吉田	No.3
5. 4~9	西丹沢	更沢、湯沢、箱根屋沢	辻(勝)、山縣	No.3
5. 18*	谷川岳	一の倉-二の沢	管野、青藤(医師)、村田	No.3
5. 19	・(合宿)	一の倉 南稜	辻(勝)、山縣、吉田、管野、山崎、村田	No.3
5. 19	・	谷川岳-蓬峰縦走	龜江、田中(党)、青藤(医師)、中島	No.3
6. 2	丹沢	葛葉川溯行-三の塔	筒井、近藤、董塚	No.4
6. 2	丹沢	四十八瀬川 勤七沢	村田(単独行)	
6. 16*	谷川岳	一の倉ニルンゼ Bルンゼ	辻(勝)、村田、山縣	No.4
6. 18~20	尾瀬	湯小屋-笠ヶ岳-至仏-尾瀬	辻(勝)	No.4
7. 16~21	南アルプス	荒川-細沢-廊岳-塙見	辻(勝)(単独行)	No.5
7. 25~30	南アルプス	仙丈-北岳-鳳凰	山縣、辻(勝)、吉田、村田(神沼)、植森	
7. 14~15	南アルプス	駒ヶ岳 経寒宮沢	近藤、白石	
8. 3*	谷川岳	幽沢石段	辻(勝)、管野	No.5
8. 4	・(合宿)	サンゲ沢	管野、辻(勝)、田中(党)、董塚	No.5
8. 4	・	ヒッコ-沢	山縣、市川、山崎、道釋	No.5
8. 5~6	・	谷川岳-三国峠縦走	(神沼)、秋池	No.5
8. 5	・	蓬峰	董塚、近藤、山縣	
8. 6.	・	一の倉ニルンゼ Cルンゼ	山縣、田中(党)、管野、辻(勝)	No.5
8. 15~16	谷川岳	一の倉田中ゼ、五ルンゼ	山縣、辻(勝)	No.5
8. 21~30	北アルプス	立山-御(ハ)者-黒部-後立山	山縣、辻(勝)	No.5
9. 15*	谷川岳	一の倉-二の沢	管野、辻(勝)	No.5
9. 23~24	南アルプス	鳳凰三山(尻山より)	近藤(単独)	No.6
10. 5~6	西神山	中双里-西神山-白位差	大武、青藤、村田	No.6
10. 14~15	吾妻守護良	板谷-蓼科-東詔-吹音根岳	山縣(単独)	No.6
11. 5.	白毛内	土合より	辻	

11. 10	武甲山		菅野	
11. 17*	丹沢主脈	蛭沢-塔ヶ岳-蛭ヶ根	村田(单独)	
11. 23~24	八ヶ岳	阿弥陀-赤岳-硫黄岳-天狗岳-益	山縣(单独)	No.6
12. 1	奥武藏	棒ヶ岳	大武山脈・筒井・辻嶋・田中(見)・村田	No.6
			横山・吉野・齊藤(良夫)・堀塚・立藤	
12. 17*	谷川岳	スキー	吉田(单独)	
12. 25*	吾妻耶山	上牧-大峯沼-吾妻耶山-水上	山縣(单独)	
12. 29* ~1.4	志賀高原	発哺、スキー合宿。	柿沼・山縣・東・齊藤(良則)・齊藤(良夫) 篠崎・村田・田中(良)	No.7
1. 3~6	石打	中之島、スキー合宿。	菅野・龜江・星野・大武・辻(勝)・白石。	No.7
1. 19*	霧ヶ峰ツアーハルムニ	軒山-白樺湖-雨平-親湯	篠崎・辻(勝)・山縣	No.7
1. 26*	・	強清水-軒山-白樺湖-八ヶ岳-親湯	柿沼・山縣	
2. 9*	・	・・・-蝶ヶ岳山-八島-坪	山縣(单独)	
2. 22~23	安達太良山	土湯-野北-安達太良-岳	山縣・篠崎	No.7
2. 23*	土樽	スキー	菅野	
3. 2*	谷川岳	マチガ沢=の沢-トマの耳-西雲龍	吉田・辻(勝)	No.7
3. 2*	霧ヶ峰ツアーハルムニ	強清水-軒山-白樺湖	村田・齊藤(良則)・龜江・吉野	No.7
3. 20*	白毛内	土合-白毛内-土合	菅野・山縣	No.7
3. 21*	大峯山口吾妻耶山	上牧-大峯山-吾妻耶山-水上	筒井・山縣・柿沼・大武・吉田・菅野・龜江 齊藤(良則)・齊藤(良夫)・星野・吉野・篠崎	No.7
3. 27~29	仙丈岳	戸台-北沢峠-仙丈	柿沼・山縣	No.7

以上の外、報告なき山行もいくつがあると思われます。

◎ 毎月の山詰会でその一ヶ月間の山行報告をしていましたが、山詰会で計画された山行以外の山行となさる時は、予め本部へ期日、メムバー、コースその他参考事項を必ず連絡しておいて下さい。

本部(辻宅)への葉書連絡か、或いは山縣氏の勤務先(市商)への電話連絡(浦2395)、夜間ならば書記村田君(浦4413)へ電話連絡でも結構です。万一の場合ということもありますから、その意味ても必ず実行して下さい。



# 会務報告

一、去る三月七日夜、市川食堂において昭和三十二年度を終るに当つての総会が開かれ、次の事項が行われた。

(一) 十二月山詣会以後の山行報告。

(二) 新会員紹介

柿沼博・浦和市立高教教諭(敬母)

山の経験豊富、特に北ア

は詳しい。

篠原健二・小林敏子・野田靖子

何れも浦和市立高山部今年の卒業生。

なお都合で出席出来なかつたが、やはり今年の卒業生で入会した新会員は

滝沢広保・柏浦哲・高須賀重行

の三君である。

(三) 会則検討

三六、三七頁参照

(四) 役員改選

三七頁参照

(五) 会員証作成の件

会員証を作ることを決め、その仕

事は役員会に一任。

(六) 合同山行の件

三月二一日吾妻耶山に決定。

二、会計報告

昭和三二年度の残高ハ〇一〇円。

ザイル・テント等今け度購入したいものは沢山あります。公費未納の方はなるべく早くお払い下さい。

山詣会の時、御用意下さい。

三、四月山詣会

四月四日夜山縣氏宅において山詣会が行われた。

幹事長候補二名。

(◎) 五月三・五日の連休の山行が相談され、西丹沢合宿、中央アルプス、南ア鳳凰三山が候補地に決められた。各候補地についての計画の概要は、

西丹沢

三日間の連休の中、一日だけでも、二日でも、

或は三日前参加してよい。(テントはずつと張つたまゝにしておく)場所は中川川流域、又は玄倉川流域、次登り、燃場の基礎訓練を行う。

今迄余り危険をやつていよい者はこの際是非参加して経験を積まんことを望む。費用を使える人は、学割を使って行く方法もあり、費用は